

# 巻頭言

## 「ミニ盆栽とヒマラヤスギ」

理事長 新谷友良

三鷹の神代植物公園で買ったサツキの盆栽「早乙女」が枯れてしまったようです。去年の11月の気持ちの良い秋晴れの日、何年かぶりで神代植物公園に行き、公園の植物売店でつやつやと葉をつけている「早乙女」を見つけて、盆栽の知識がゼロのまま購入しました。

買ってきてしばらくの間は、水やりを欠かさず日中は陽に当て、順調な生育でした。それが1月頃から枯れた葉が目立って多くなり、肥料不足かと思って園芸店でパイポネックスを買ってきて盆栽の土に差し込みました。一時的に葉は元気になったような気がしましたが、買ってきたときのつやがなく、枝を掃うと葉がどんどん落ちてしまいます。仕方がなく、枯れた葉のついている枝を全部切って、根元の方から新しい枝や葉が生えてくるのを待っていますが、再生の可能性はほぼなさそうです。

今まで手許に置こうなどと考えたこともなかった盆栽をどうして買おうと思ったのか、その時の気持ちを思い返しています。空が澄み切っていて、その中で小さな葉が塊りを作り、赤ん坊の腕のようにふくらして、生命感にあふれていました。おそらく、コロナ感染がもたらす不安のなかで、少しずつ成長していくものを毎日見ることので安心したい、確実なものを身の回りに置きたい気持ちがあったと思います。

そのような時、最寄りのJR駅前で100年以上続いていた結婚式場が閉館になり、取り壊しが始まりました。敷地は樹齢が重なった椎の木とヒマラヤスギが取り囲んでいて、どうするのだろうと心配していましたが、椎の木の大木は残されて、ヒマラヤスギは3本ほどを残して全部切り倒されてしまいました。残されたヒマラヤスギの根元はむき出しになり、無残な光景です。

ミニ盆栽が枯れ、見慣れた建物をしっかり守っていた木が切り倒されて、気持ちが凹みます。池澤夏樹は「母なる自然のおっぱい」という本の「樹木論」で「木の下に立つことには安心感がある」と書いています。「木はしっかりとした幹を地上から立て、頭上にはやさしく枝を張って、そこに立つ者を守ってくれる。風とおしのよい疎林の心地よさの中には、頭上を守られ、周囲も守られているという安心がある」、この本はKindle版で読みました。Kindleのロゴには大きな木の下で本を読む少年がデザインされています。この夏はKindle本に安心を求める夏になりそうです。